

実践報告

美術館ごっこしました！

浅野 公介 (東京14期)



今回、富山県美術館の瀧川先生の研修を受講し、何かこのアートなアイデアを活かして自園でも取り組めることはないかと模索した結果、この実践にたどり着きました。これは、保育室を美術館に見立てて、絵画を部屋にたくさん飾り、鑑賞して回るというものです。

私が受け持つクラスは、0～2歳の縦割りなのですが、今回の美術館ごっこをするにあたり、満2歳以上の子どもを対象に行いました。使用する絵画は、くもん出版から発売されている名画カードというものを使用しました。いわゆる名画と呼ばれるレオナルドダヴィンチのモナリザや、ミレーによる落穂拾い等の作品が31種類入っており、カードの裏にはタイトルや作者、絵画にまつわる簡単な歴史や見どころポイントなどが書かれています。美術館ごっこでは、保育室の広さの問題でこれらのカード全てを並べることができなかつたため、できるだけ雰囲気が出せる印象のものを厳選し、見やすい高さや間隔を意識して壁に並べていきました。さあ、簡単ですが、準備は以上で終了です。子ども達を呼んでみましょう。

「ねえ、美術館に行ったことある？行ってみたい？」とお仕事が終わった、もしくは手持無沙汰な人に声を掛けます。子ども達は「行ったことない」と保育者の誘いにすんなり乗ってくれました。美術館という存在を知っているかは分かりませんが、何か楽しそうなことが準備されていることを察したようです。あまり広くない保育室であったため、並べた絵画の量もあり、2人ずつの少人数で別室に移動しました。

別室に入るといつもとは違う、絵画の並べられた様子を見て、不思議そうにする子ども達。絵画を見て回る前に、あくまでも美術館という体裁なので、美術館での最低限のマナーを伝授しました。他に絵画を見て楽しんでいる人の迷惑になってしまうから、①歩くこと、②小さな声で話すこと、作品は一つしかないの汚したり壊したりしないために③作品には触らないことの3つを伝え、あとは自由行動

です。手前から順番に見ていく人、順番は気にせず心の赴くままに進んだり戻ったりして好きそうな作品をかいつまんで思い思いに見ていく人、ふいにピンと来たようで一つの作品に一目散、一心不乱に近づいて行って長い時間かけてじっと眺める人など、子ども達はそれぞれ合った鑑賞法で楽しんで回っていました。特に、レオナルドダヴィンチのモナリザは、足を止めて深く眺める子どもが多く、名画には老若男女問わずに惹かれる魅力が備わっているのだなと感じました。また、「これはなんだろうね」「何をしているのかな？」と聞くと、「〇〇ちゃんのお友達！」「水の中に潜って苦しそう！」などと応えてくれていましたが、事前に各カードの裏に書かれたミニ情報を読んでいる私は、作者の意図とは全く異なる解釈をされているのをとても興味深く、感動すら覚えました。

私が最初に各絵画を並べ始めた時、それぞれが実際に置かれているフランスのルーヴル美術館やスペインのプラド美術館といった、各美術館で固めて並べようとしていたのですが、それはやめて雰囲気が出せるようにだけ意識して深くこだわらずに並べました。それがかえって、子ども達が各絵画をピンと来やすくさせていたようで、これは瀧川先生が研修内の質疑応答の際に、子ども達に見せる絵画を選ぶコツとして仰っていたポイントだったので、その通りにして正解だったと実感しました。

今回、こういった美術館ごっこをするにあたり、はじめは子ども達が本当に楽しめるのか心配でした。私自身も美術館に行った経験が指で折る程度しかなく、瀧川先生のような知識や経験が豊富なプロの方に紹介される方が、子ども達は興味や好奇心が湧きやすいのではないかと考えていたからです。しかしながら、蓋を開けてみれば、子ども達は自らの足で興味のある絵画の前に進んで行き、眺めては夢中になっている様子を見て、大人が抱く杞憂なんて無意味なものだと感じました。有名な画家、難しい技法であることなど、それぞれの名画が名画たる理由はあると思いますが、何はともあれ、子ども達にとってそれは関係なく、自分の少ない経験や知識の中から想像を膨らませ、物語を導き出す面白さを味わっているようでした。瀧川先生の研修を受けなければ絶対にやることのなかった美術館ごっこ、近々2回目を行いそうな予感です。